＜報告＞

北海道における
独居高齢者調査の現状と課題

北海道大学大学院　文学研究科　宮嶋　俊一

本稿は、「北海道における高齢者の孤立化に関する発展的研究」（科研費基盤研究 (C) 16K04075）の一環として行われている独居高齢者へのインタビュー調査に関する報告である。ただし、本報告はデータの厳密な分析によって導出されたものではない。研究調査を進めていく中で気がついたこと、気になったことを調査者の一人である宮嶋がメモ書き風に記したに過ぎない。だが、折に触れこのような確認作業を行いながら研究を進めていくことが重要であることを鑑み、不十分ながら報告を行う。

（1）研究のねらい

本研究は、近年増加しつつある独居高齢者を社会として支援するために何ができるかを明らかにすることを大きなねらいとしている。そのために、北海道札幌市（都市部）、留萌市、釧路市、黒松内町在住の独居高齢者に関する実態調査を行っている。とりわけ、独居年数の比較的短い前期高齢者を調査対象者として選ぶことで、独居初期の困難な時期の状況と団塊世代を含む高齢者の状況を明らかにすることを目指している。

（2）個別訪問調査の概要

戸別訪問調査にあたっては、NPO 法人るもいコホートピア、月寒ファミリークリニック、NPO 法人地域健康づくり支援会ワンツースリーなど、診療所、地域医療・地域保健活動や健康促進活動のための NPO 法人の協力を得ている。

質問項目は、おおよそ以下の通りである。

・一人暮らしをはじめてどのくらいか、またその経緯
・日課（ライフスタイル）
・普段感じていること（孤独、寂しさ、辛さ、怒り、楽しみ、満足感など）
・周囲の人々との関係について
・地域についての思い
・一人暮らしの生活で支えになっていること
・必要としているサポート（話を聞いて欲しい、用事を頼める、住宅や財政面での自治体からの援助など）
・周囲や社会に訴えたいこと、今後の暮らし方への思い

これらの項目について逐一問いただしていくのではなく、比較的自由な語らいの中でこうした項目について聞き取るようにしている。

本報告の執筆者である宮嶋がこれまで参加してきたのは、以下の調査である。

2016 年

3 月 21 日（月）～ 23 日（水）黒松内町（オブザーバー参加）で 3 名のインタビュー調査に参加

10 月 19 日（水）月寒ファミリークリニック開催「ふれあい喫茶」（お茶菓子を一緒にしながら団欒をする会）に参加

10 月 26 日（水）2 名（73 歳男性、70 歳男性）に札幌市内（月寒）でインタビュー調査

11 月 16 日（水）「ふれあい喫茶」に参加

11 月 28 日（月）1 名（72 才女性）に札幌市内（月寒）でインタビュー調査

2017 年

1 月 22 日（日）1 名（77 才女性）に釧路でインタビュー調査

2 月 15 日（水）「ふれあい喫茶」に参加

（3）調査を通じて気がついたこと

1. 調査に協力していただける方、いただけない方

以下、調査を通じて気がついたことや考えたことなど、記していく。既述の通り、今回の調査では診療所や、地域医療・地域保健活動や健康促進活動のための NPO 法人の紹介で調査協力者を探し出しているが、こちらの調査条件に合致していても調査に協力いただけないという方が少なくない。その理由として、札幌市内（月寒）の場合は、独居に至る経緯（離婚、死別など）をあまり語りたくないという方が多い。特に、独居生活に入ってから、あまり日数が経っていない場合などである。ここに、今回の調査のジレンマが存在している。われわれの調査は、独居生活に慣れた方ではなく、むしろ独居年数の短い方を調査対象とすることで、独居初期の困難な状況を浮き彫りにすることを目指しているが、そのような困難（とりわけ精神的な困難）が調査拒否の理由となっているのである。

また、65 才から 75 才の方々は高齢者と言えどもかなり元気で忙しく過ごしており、そのため、調査に応じる時間がない、という声も耳にした。そもそも、元気で忙しく出歩いているということであれば、話を聞いたとしても「困っていることはありません」で終わってしまうであろう。課題を探ることを目的とするのであれば、こうした方々が調査から漏れてしまうことは、さほど大きな問題にはならないのかもしれないのだが、少なくとも問題なく過ごしている人たちも多く存在しているということを気に留めておく必要はあるだろう。

釧路の場合には、初対面の人と話をするのに抵抗があるという理由で、調査を拒む方がいた。大学の研究者がいきなりやってきて、自分の生活について根掘り葉掘り聞いていくことに不安を感じている上、調査に協力することで自分たちにどのようなメリットがあるのかもわからないのであるから、このような反応も当然であろう。

逆に、これまで調査に協力してくれた方々に関して言えば、札幌市内（月寒）の場合、一見して（経済的にも、精神的にも）生活が安定しているという様子の方が多い。そういう方が問題を抱えていないというわけではないが、それにしても「経済的に困窮していて生活を見られたくない」、「精神的に苦しく、人と話ができる状態ではない」ということはない。インタビュー中、「孤独死し

た方の後始末をした」という話を聞いたこともあるが、調査に協力してくれる方々には、そのような心配を感じることはなかったし、逆に孤独死をする可能性を抱えた状況で暮らしている方々を見つけ出して調査することははなかなか難しい。

さらに、男性の調査協力者の方で、現役時代、営業職についていたという方が何人かいた。「初対面の人と話をするのが苦にならない、むしろ話好き」という方々である。そういう方は、コミュニケーション能力が高く、独居生活が始まっても人間関係を維持したり、広げたりすることができている。だが、「人と話をするのが苦手」という方（すなわちそれを理由として孤独に陥りがちな方）には、そもそもインタビュー調査に応じてもらえないのである。

それに加えて、営業職に付いていた男性の中には、単身赴任の経験があり一人暮らしには比較的慣れているという方が多い。「食事が作れない」、「掃除や洗濯ができない」といった生活上の困難に直面している方はいなかった。

なお、調査について十分な理解が得られなかったり、誤解されているのではないかと思えるケースもある。例えば、「大変なこと、苦労していることはあるが、話してどうなるんだ。何かしてくれるのか。年寄りはみんな苦労しているんだ。自分ひとりが文句を言ったところで、問題は何も解決しないではないか」と言われた、という声も耳にした。調査を依頼して下さった方は「高齢者の置かれている現状を知るためには、一人ひとりの声を集めていくことが必要である」と説明してくれたが、結局調査の了解は得られなかった。調査そのものが直接的な問題解決の手段ではない。よって、そのように言われてしまえば、調査を無理強いすることはできない。だが、こうした声を踏まえ、調査依頼用の文章を作成したり、それを掲載したチラシを作成したりすることで、できるだけ調査への理解を深めてもらう努力も必要となるだろう。

２．本調査の意味　～調査の実践性について～

本調査において明らかにされるべき「困難」には、大きく分けて２種類あると言える。そのひとつは、生活上の困難（買い物が大変、病気で倒れたときどうしよう、など）である。そしてもう一つは．精神的な困難（淋しい、話し相手がいない、など）である。調査協力者の方と話をしていると、いずれかに言及する方は少なくない。ただし、後者に関しては、本音を聞くのはなかなか難しい。口では「死別した配偶者のことはもうあまり思い出さない」と言いながら、悲しげな表情を浮かべる方もいる。どこまで当事者の気持ちを「忖度」すればよいのか、難しい課題もある。

ただ、いずれにしてもわれわれ調査者がそうした話を聞く立場であり、インタビュー調査そのものが「傾聴」という実践的な役割を担っていることは確かだ。年齢的なことを言えば、調査者の多くは調査協力者の子どもと同世代であり、そうした観点から話がかみ合ってくることも多い。さらに言えば、一人暮らしに至った経緯を語ることが、自らの人生を振り返る契機になっているとも感じる。それをナラティヴを通じた人生の再構成と考えてもよいだろう。このように考えてみると、本調査は調査協力者の方々にとっても何らかの意味を持ちうると思える。

徐々にではあっても、調査の回数が増えていくことで、こうした調査の意義についての理解も広がっていくであろう。またそうなれば、これまで調査から漏れてきた方々に接する機会も増えてくるであろうし、そうした方々から傾聴したことが今まで見えてこなかった問題を掘り起こす契機ともなる。そうしたことを可能にするためにも、できるだけ頻繁に調査地を訪れ、交流を維持し、調査を深めていくことが重要な課題となる。

（4）今後の課題

本報告執筆者である宮嶋は、元々、宗教学からこの調査に参加している。それゆえ、高齢者の来世観や死生観などに興味を抱いている。調査協力者の中で、仏壇、神棚などの所持者は多く、そうした方々は仏壇や神棚に手を合わせることを日課としている。カミであれ、仏であれ、あるいはご先祖様であれ、そうした存在と向き合うことから一日を始めるという一人暮らしの方々が多いのである。そこに、亡くなった配偶者や家族との「コミュニケーション」が存在している場合もある。精神的な困難に関連して、広義の「宗教」の果たす役割について、本調査を通じてさらに考えていきたい。